

評価の実際とその方法

黒田 成子



「お宅のM子ちゃんは絵も歌もお上手でお友達にはやさしくて、本当によいお嬢さんで……。それに此の頃は随分しっかりしていらっしやいます。」

幼児に対して何の根拠もないこんな評価がその教師の口から父兄に云われるならば、それは無謀この上ない事である。けれども忙しくてゆっくり観察する暇のない教師の多くは父兄から「うちの子供はどうですか。」と聞かれる時、この様な返答をするのに慣れてしまっているのではないだろうか。

或る教師達は、私は幼児に種々のテストを行い正確な評価を行っている」と抗義するかもしれない。併し、未知数の幼児の姿を単に数種のテストのみによって完全な評価が出来たと断定するのは早急ではないかと思う。

近頃の教育のあり方は従来のように単に子供を学問の習得をしようとする個人として見る丈にとどまらないで、全人的な者

として見る傾向が強くなって来ている。幼稚園では所謂学問と云うような勉強はしないが、子供達は絵をかき歌をうたう事や、ものを製作する事や自然科学に関する知識等を学び乍ら、又遊びを通して、自信を持つ事、他人と協力する事、それぞれ責任を取る事等に毎日驚く程沢山の事をおぼえ、身心ともに伸びて行く。

幼稚園の教師が今日は何をしようかと漫然と不用意な計画をたててその日暮しの保育をして行くのであればそれはまことに心細い教育といわなければならない。此頃個人差という事がよく云われるが、個人差に応じた教育をするためには子供一人一人をよく知らなければならない。個々の子供がどのようなニードを持っているかを知るためには評価という事が欠く事の出来ないものである。個々の子供の評価無しでは子供達に適したカリキュラムもたてる事は出来ないのである。

子供を評価すると云っても評価を行う者によって見方が異なるわけであるから評価の基準をどこにおくかという事は非常にむづかしい問題になって来る。

幼稚園の園児を評価するに当って少くとも次の五点を考慮しなければならない。

- 一、子供が入園した時の発達の状態を一応の基準とする。又その幼稚園でたてた特定の目標を一つの基準とする。
- 二、在園中、園児の発達と行動に関して、出来る丈の資料を集める。
- 三、最初の評価以来現在迄どれ丈の発達が見られるかを資料

よって解釈する。

四、個々の園児が同年令のグループの中ではどのように比較されるか。

五、将来に対してどのような経験が望ましいか。子供の最大限の発達をもたらすため、指導目標の再検討をする。

第一の点について一つの例をあげてみたいと思う。

K子は一入子で自分の知っている歌や又自分の得意な遊びが行われている時は機嫌がいいのであるが、それが知らない歌になったりむづかしい仕事になるとワッと泣き出す。このような子供をどのように指導したらよいであろうか、つまりK子のニードというものは物事に失敗しないかという或る未知のものに対する恐怖心を除去する事である。平気で大たんに新しい仕事にぶつかって行く事をおぼえなければならぬ。それには教師はK子が始めは容易に成功出来るような仕事を選び、安定感を養い次第に小さな恐怖心をなくしてどんな仕事に当たっても自信をもってやり遂げる事が出来る様に誘導する事である。K子はこのようにしてグループの中に入って他の友達と一緒に仕事も出来るようになる。一学期、或は一年の終りにはK子の社会性がどれ丈発達したかという事が問題となり、評価されて記録簿に記入される。この場合基準となるものは人園当初のK子の状態とその園でたてている生活目標である。

資料を集める事

子供の発達と活動に関して資料を集める事は単に研究のためのものではなく、あくまでその子供に焦点をおき、その子供を

知る為に役に立つ資料でなければならない。その際たえず注意しなければならぬ事はこの資料によって子供の過去の姿と現在の姿とを比較してどの程度発達を遂げているかという事を見る事である。

この様な観察をしているうちにその子供の知的、社会的、情緒的、身体的発達に関してその子供に独特の型が見出せるようになる。これこそその子供を評価する最も重要な基準となるのである。幼児の評価を行う時、それがAとBを比較するのではなく、過去のAの状態と現在のAの状態とを比較しなければならない。そうすればAはいつも優秀であり、Bはきまって劣等であるというような、意味のない評価は出来なくなる。AならばAという子供を彼自身の持っている固有の尺度で計ってはじめて正しい評価が出来るのである。

累積記録をつける事

幼児を長い年月に亘って観察して行く場合、是非累積記録を造って個々の幼児に関する明確な観察を継続して行きたいものである。一度此の記録を始める時、評価に当って簡単に「あの子はやさしい子供だ」とか「きつい子供だ」という漫然とした又単に主観的な思いつきが云えなくなる。この記録は年少組の教師から年長組の教師に、続いて小学校へ、進学後も学年が進む毎に教師に引渡されて行く事が出来れば理想的である。この記録の中には逸話記録や様々のチェック、リストやテストの結果等を入れるのがよい。

(1) 逸話記録 これは用務の多い幼稚園の教師にとっても慣れ

れば容易に出来るものである。上着のポケットにメモと鉛筆を入れておき、或る子供の著しい行動や言葉を見付けた場合そのままを記しておく。これが非常に活きた記録になるのである。

勿論その観察が子供の社会的適応の問題に限られるという制限があるが、この記録をつけてみると今迄どれ丈不用意に大事な観察を見逃していたかがわかり、非常な参考となるものである。一日に二、三人を決めて観察する事にすれば目立たない子供を見落すような事がなくなる。又記録を頭の中に蓄積しておくよりは紙ばさみにメモをはさんで置いて毎月或は一学期一回整理しておく事が合理的又効果的である。次に一つの例を示して見よう。

或る教師が入園後六週間経ってもひどく破壊的な傾向のある子供の処置に困っていた事があった。その母親との面接でその頃その家に赤ちゃんが生れた事を知って多分それが原因をなしているのであらうと推定した。所がこの子供をよく観察し、毎日記録をつけると、思わぬ所に解決のきっかけを見出したのであった。というのはこの子供が幼稚園でほうきを持つ時の嬉しそうな表情や態度が彼の他の行動と非常に違うので母親にこれを話したところ、彼は潔癖過ぎる位きちょうめんな子供であるという事がわかった。

それから毎朝他の子供達が登園する十五分前に彼を登園させて、部屋の整頓を手伝わせたところ大喜びであった。或る朝先生が「折角こんなにきれいにしてもすぐ又皆が来るときたなくしてしまうのね。でもお友達と皆でお仕事するのは面白いでし

よう。」というとき彼は「うん」と気のない返事をし、よこされるのが不満の様子であった。しかし彼は友達のかう部屋を片づけ乍らだんだん他の友達のものも関心を持つようになっていった。この子供は製作の時の乱雑さにいらいらして乱暴を働いたのだったが、その子供について記録をつける事により、教師が彼の非社会的な行動の一つの大きな原因を見出したため、彼に対して非常に働きかけがし易くなったのである。これも観察を怠っていたなら見逃してしまったかもしれない。

(2) 製作の記録 幼稚園でつくった絵や製作に関して記録する。時には粘土製作の写真等取っておくとよい。仕事をする時の習慣態度等も参考となる資料である。

(3) 行動に関するチェック、リスト。これは三―五段階位に分けてチェックする。指導要録をつかってもよいし、教師が自分のつけ易い表をつくってもよいと思う。これをつける事により、子供が身体的、情緒的、知的、社会的適応に関してどの程度の能力があるかその度合を見る事が出来る。

(4) 知能テスト、レディネス、テスト。学令前の子供に行つたテストの結果と、子供が就学してから行つた学力テストとの相関性は低いといわれている。テストの結果を徒らに盲信したり、その結果を乱用したりは出来ない。幼児の場合特にテストの結果は参考程度に使用する事にとどめるべきである。

(5) 家庭に於ける資料。家庭に於ける状況。入園以前と以後に見られる変化、興味の対象、態度、言語、遊び等の状況。家族、友人との対人関係等。

このようにして教師は子供達に関する資料を集め、それを解釈し利用しなければならぬ。又この場合幼児の心理をよく識り、社会的諸条件、家庭環境等をひろく考慮しなければならぬ。又資料が正確であれば顕著な行動の反復が見出され、その中に何らかの型が見出される場合が多い。これらは二、三の記録によるのではなく、なるべくひろく沢山の資料を集めてそれに基づいて客観的に判定する事が大切である。

以上のような諸点に考慮が払われる場合、評価は子供の過去の経験を表わすと同時に将来向うべき方向をも示す一種の道標となるのである。

面接について

子供達の評価を行った後如何にして家庭にそれを伝達するかが次の問題となる。幼稚園では小学校のような成績表を作る事は穩当でない。又家庭を訪問する事も意義はあるが家庭ではその子供を除外して話しにくい。教育上効果のあるのは面接である。しかも家庭でなく教室で行う事が最もよい方法である。此処では教師が主となり、父兄との話しのポイントがいつも幼児の教育の問題に集中する事が出来る。又幼稚園へ来れば父兄には教師からその子供の教育に関し大切な事項を受け入れ度いという真剣な態度がある。

面接は少くとも年二、三回、即ち一学期一回位が適當である。時間は一人三十分位が適切と思われる。あまり長くなる事はかえって効果が薄くなる。しかし、特別のケースはこの限りではない。最初の面接は学年の初期がよいが、勿論教師が子供

について観察し、ある程度の理解を持ってからにしたい。特に入園前の状況について話し合い、教師の保育計画を知らせ、又父兄がどういふ点で協力出来るかという事について相談し合う事が必要である。

面接を行う時の心構えとして次の諸点をあげたい。

1. 面接の前に教師は累積記録や家庭調査書等をしらべ、充分の用意をもつてのぞむべきである。子供をひんばんに観察しておく事は勿論である。

2. 面接に当たっては先づ母親に子供の家庭に於ける状況を話して貰う。教師は幼稚園に於ける様子を話す。

3. 次に教育の重点に話題をもつて来る。

4. 資料に基づいて発達の状態について話す。よい点を先に強調して次に問題点を指摘し幼稚園ではどういふ事をしてこれを指導しているかを説明し、家庭の協力を求める。この所は教師が一人で話さないで家庭での様子など質問し乍ら母親との話し合いという形で進めたらよい。教師と母親の間にたえず好感に満ちた雰囲気の流れるように効力したい。

5. 家庭問題に深入りしないように注意し、あく迄子供の教育に焦点をおく。

このようにして面接が行われると家庭との連絡が緊密になり、子供の発達について父兄が関心を持ち教師の仕事を理解し協力する様になる。そうすれば子供の評価は建設的な意義を持ち幼児の全人的発達に大いに寄与する事となるのである。

(東京・東洋英和幼稚園)